
おりょうヶ淵

橘伊津姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おりょうヶ淵

【データID】

N79365

【作者名】

橋伊津姫

【あらすじ】

「Eの中で道に迷ってしまった」「僕」は、不思議な少女「おりょう」に助けられた。
おりょうと過ごした静かな時間。
しかしそれは、あまりにも悲しい結末を迎える。

僕がおりょうと出会ったのも、こんな雨が降っていた日だった。旅の中で山に迷い込み、立ち往生していた僕を救ってくれたのが、おりょうだった。

年の頃は五つか六つ。やせっぽちのおりょうは、山の中を一人で行き来するという。そもそもなければ、僕と出会う事もなかつたわけだが……。

おりょうの村は山間の、谷川にかかる小さな橋によつて外界と繋がっている。この橋が流されてしまえば、村は完全に外界から切り離され、孤立してしまうのだ。だからというわけでもないのだろうが、村人達はどこか排他的で、最後まで僕に打ち解けてはくれなかつた。

おりょうは不思議な子だった。生まれてすぐに両親を失くし、生まれつき声を出す事が出来なかつた。

今は村はずれの、辰ヶ淵神社の富司のお宅にやっかいになつている。村人でさえ迷つてしまふような山の中を、遊び場にしておりようは育つた。山の動物達はおりょうを傷つけることなく、良き友人となつたようだ。

山の中腹に、竜神が棲むという辰ヶ淵がある。そこで獰猛な山の動物達と戯れる、おりょうの姿を村人はよく目にしたと言つ。

富司は言つていた。「おりょうは、生まれながらの竜神の巫女かもしけん」と。それは、あながち的外れな意見ではないと、今でも僕は思つている。

僕がその村を訪れたとき、村は本来なら余計な食い扶持を養う余裕はなかつたはずだ。降り続く長雨のせいで、それでなくても瘦せた田畠は収穫が見込めず、山の恵みも僅かなものだった。そんな状態で僕が村を放り出されなかつたのは、ひとえに、僕を連れてきたのがおりょうだったからに他ならない。

村人達は、おりょうの不思議な力を気味悪がり、そして畏れていったのだ。だから、山に迷い込んだ僕を幼い子供のおりょうが連れ帰つたとき、反対意見を口に出す者はいなかつた。

おりょうを刺激しないように、なるべく関わりにならないように、元氣を出さないといふこと。

人間は、自分たちと違つ何かを持つた相手に出会つと、なぜああも交わりを絶とうとするのだろうか？

富司の家にやっかいになりながら、僕はおりょうと仲良くなつていつた。言葉は話せないけれど、おりょうは頭の回転の速い子だつた。僕が話す言葉に可愛らしい丸まつちに文字で答えてくれた。

「いつもどこで遊んでいるの？」

『りゅうじんさまのおいけ』

「誰と遊ぶの？」

「やまのみんなと、りゅうじんさま』

『山の皆は、優しくしてくれる？』

『うん。ときどきね、しかられるの。まいじになるから、あんまりとおくまで、ひとりでいっちゃいけませんって』

おりよには、動物の言葉が解るのか。おりょう自身は、当たり前の事のように文字を記していく。

『おてんきがよくなつたら、やまのみんなにあいにいこ？』

僕が行つても、果たして受け入れてもらえるかどうか……。僕が一寸、返事に詰まつたのを感じ取ると、おりょうの筆がためらいがちに動いた。

『いや？』

他人に囲まれて生活しているおりよは、何気ない仕草や間の取り方で相手の気持ちを量る癖がついているらしい。

幼いながらに彼女は、村人達が自分の事を好いてはくれていない事を察している。そして彼女なりに、これ以上嫌われないように努力しているのだ。

僕はその事に思い至つて、胸が痛くなつてしまつた。まだ、両親

に甘えた盛りの少女が、周囲に気を使って生きていかなくてはいけない。それはどんなにか息苦しい生活だろう。

「嫌じやないよ。僕じゃなくって、皆の方が嫌かなと思つただけさ」

僕の返事に、おりょうの顔がパアツと明るくなつた。

『そんなことないよ。みんな、よろこぶよ。ぜつたいだよ。やくそくだからね』

「うん。約束だね」

おりょうと僕は、しつかりと指きりをした。

それが果たせなくなる約束だなんて、その時の僕もおりょうも、夢にも思わなかつた。

村と外界を繋ぐ橋の架かつた谷川は、辰ヶ淵から流れ出している。長雨が続くと辰ヶ淵の水が溢れ、谷川の水嵩みずかさも一気に増えると言つ。万が一、橋が流れてしまつては大変だ。村人は川の水嵩が増すと、交代で橋の見回りに出た。

どうどうと音を立てて流れる川は渦を巻き、さながら竜が身をくねらせて谷を渡つているようだ。僕は天を仰いだが、厚く垂れ込めた暗雲に切れ間はなく、雨もやむ気配すらない。

おりょうも雨天続きで遊びにも行けず、つまらなそうにしている。「よく降る雨だね。いつになつたら、やむんだろう」

僕がおりょうに話しかけると、彼女は側にあつた雑紙に、こう書き記した。

『りゅうじんさまのきがすむまで。おりょうがあそびにいかないから、やまのみんなもあそびにいかない。だから、りゅうじんさまはさびしがつてる。でも、あめだから、おりょうはでられない』

なるほど。それはややこしい事になつてゐる。雨のせいで誰も遊びに来ない事に拗ねた竜神が、更に雨を降らせていると言うのだ。僕にも「神」ともあるものが、そんなに大人気なくていいものだらうか?

……いや。大人氣があつたら、そもそも「神」なんていう面倒

な事はやつてないか。などと、不謹慎な事を勝手に考えてみたりもする。いざれにせよ、雨がやまない事だけは確かだ。

その頃から、富司の家の一角に、村人達が集まるようになつていった。

「富司様。このまんまじや、いづれ橋は流れちまつ。どうにかせねば」

「どうにかつちゅうても、どうすればいいんだ?」

「今年は田畠の実りも少ねえ。山に入つても、いつものようにはいかねえ。こんな状態で橋が流れたら、それこそ村は飢え死にだ」

「富司様、どうしたらえんじやるう?」

村人達から、いつせいに目を向けられた富司にも、何かいい知恵があるわけではない。考え込んでしまつた富司に、誰かがポツンと呴いた。

「いつそ、人柱でも立て……」

その場の空気が一瞬にして凍りつた。

「人柱」 生贊を生き埋めにして橋や建造物の守り神にする。その習慣は、現代でこそ行なわれなくなつたが、その頃の地方の集落では、まだまだ活きていた。いや、地方だけではなかつたのだろう。都市部でも、おそらくは行なわれていたのではなかろうか。それだけ、この「人柱」という手法がこの国に深く根付いていたという事だ。

「馬鹿な。それに、誰を人柱にするというんだ」

何人かの村人から、反対意見も出た。しかし「人柱」のひと言は、その場にいた全員の胸に重く響いたのだ。

なんの解決策もないまま村人を解散させた富司は、囲炉裏端に座つて遊んでいた僕とおりょうの側にやつってきた。

「おりょう、今日は何をして遊んで」

おりょうに話しかけようとしていた富司の目が、先程おりょうが書いた雑紙の上に落ちた。

「これは？」

僕が田をやると、それはおりょうが竜神様について書いた紙だつた。

「ああ。それはさつき、僕がいつまで雨は降るんだろうね？ と聞いた時に、おりょうが書いたんです。子供って、面白い事考え付きますね」

「あ、ああ。そうだね……」

僕の答えを聞きながら、富司は上の空で返事を返した。

荒れ狂う谷川の猛威に耐え切れず、とうとう橋が落ちたという連絡があつたのは、その日の夜更けの事だった。

駆けつけた村人達は呆然と、ポツカリと口を開けて横たわる谷川の暗闇を見ていた。岸にしがみつくよつにして残っている残骸が、ここにさつきまで橋があつた事を物語つている。

一向にやむ気配のない長雨と、収穫の少ない田畠。そもそも備蓄の多くを、山の実りで賄つていた村人達にとって、実りの恵みが少ない年があるなどとは、考へてもみなかつた事なのだ。カツカツの生活を強いられていた村人は、橋が流されてしまった現実を目の前にして、感情が爆発してしまつた。

「何で、今年に限つてこんなに雨が続くんじゃ！？」

「山に入つても、ちつとも獲物が手に入らん。山菜だつてわずかにしか取れん」

「そのうえ橋が流されてしまつたんでは、麓の村まで谷沿いの山道を歩かにゃあならん。それでは、荷物を背負つて戻つてくるのは無理じや」

「どうして、こんな事になつてしまつたんじや！？」

抑えていた鬱憤うつぶんが、重石おもしが取れてしまつたかのよづに溢れ出す。

「誰かが、竜神様を怒らせたんじや！」

老人の悲鳴のような声が雨の中を貫いた。一斉に声のした方へと顔を向けると、人垣の後ろの方から、一人の老人が進み出てきた。

「庄屋さま……」

僕の隣に立っていた富司が、老人を認めて呟いた。庄屋さま、とは村長の事で、村一番の分限者である。八十歳に手が届こつかとうお歳だが、かくじやく矍鑠としており、そちらへんの若い者よりも元気に見えた。ただ、さすがにこの時は、相次ぐ変事にやつれて見えた。

「これは、誰かが辰ヶ淵の龍神様を怒らせたせいに違いない。そやつのせいで、龍神様が雨を降らせ続けているんじゃ！ そやつを探し出して、責任を取らせよ！」

目が違う。余所者の僕を胡散臭く感じながらも、表面上は礼仪正しく接してくれた庄屋さまの目ではなかつた。常軌を逸してしまつた、血走った目。

「このままで、村は飢え死にしてしまう。その前に、龍神様を起こらせた奴を見つけ出して、差し出すんじゃ！」

庄屋さまの暴走してしまつた感情の昂ぶりが、徐々に村人達にも伝染していった。

「そうじや……。きっと、そうじや！」

「一体誰が、龍神様に」

「村を滅ぼすつもりか！」

あちこちで、責任の擦り付け合いが始まつた。お前があの時、こんな事をしたから。いやいや、お主こそ、あの時こんな事を言つたではないか。

何と浅ましい……否、これこそが人間の本質なのかもしれない。

「富司さま。何でこんなになるまで、龍神様を放つて置いたんじゃ。お主、竜神様をお守りして、お祀りするのが本分じゃろうに！ お主が急けたせいで、龍神様がお怒りになつたに違いない！」

理性がどこかへ飛んでしまつたらしい老婆が、富司を指差して叫んだ。批難は、瞬間に富司へと移つた。何本もの腕が、富司の濡れた着物を掴む。引き摺り倒そうとする村人達に向かつて、僕は声を張り上げた。

「何言つてゐんですか！ そんな非科学的な事！ 竜神なんて、本当にいるわけないでしょ！ 長雨だって、天候不順のせいだ。竜

神が怒つているから雨がやまないなんて、いい歳をした大人が、何を子供みたいな事を言つているんだ！」

富司を捕まえている腕を払いのけて、僕は彼を庇おうとした。

「つるさい！ 余所者は黙つておれ！」

「余所者が口を挟む問題ではないわ！」

どこからともなく、石が飛んできた。棒切れが肩に当たる。余所者のくせに……余所者のくせに……。四方八方から石が投げつけられる。

「止めてください！ 止めて！ 止めるんだ！」

大きく叫んだ瞬間、僕の額に大きめの石が投げつけられた。ゴツ、という鈍い音。そして衝撃。熱を持ったように疼く額から、生温かいモノが流れ出した。

僕が怯んだ、その時。僕の目の前にいた男が、僕を指差して言った。

「お前か……。お前がこの村に来たから、竜神様がお怒りになつたんだ。竜神様を信じない、お前がこの村にやつてきたから」

皆の目付きが変わつた。殺氣立つた目。怒りに燃える目。違うと言いたかつたが、石をぶつけられた衝撃で、頭がくらくらして何も言えない。伸ばされた腕が、僕を引き摺り倒した時。

「違う！ その人じやない！ おりょう。おりょうなんだ！」

僕は聞こえてきた声を信じられない気持ちで聞いた。叫んでいるのは富司。凍りついた村人の間から、彼がしゃべっているのが見えた。

「おりょうが竜神様をお慰めしないから、こんな事になつたんじや。悪いのは、その人ではない。おりょうなんじや」

何を！ 違う！ おりょうは悪くない！ 兩親に先立たれて、言葉もしゃべれず、村人にも受け入れられず、それでも一生懸命に生きてきた、たつた五つのおりょうに、全ての罪を着せると言うのか！！

泥の中でもがき、自分の血と泥で斑になつた視界で、僕は富司の

姿を探した。叫ぼうと口を開けたが、雨と泥が入り込んで言葉にならない。でも、おりょうが……。何も悪くないおりょうが……。

僕はそのまま、意識を手放してしまった。

結局僕は、おりょうのために何もしてあげる事が出来なかつた。次に僕が目を覚ましたのは、富司の家の土蔵の中だつた。どんなに叫んでも、誰一人としてやつてはこない。こんな事をしている間にも、おりょうがどれだけ酷い目にあつてゐるか……。僕は必死で柱に縛り付けられた繩を解こうとした。

僕が大声を出しながら身をよじつていたとき、山全体が震えたような音がした。

何とも形容しがたい音。

山が生きているような、何かを悲しんでいるような、そんな音だつた。

そして僕には解つてしまつた。その瞬間、おりょうの命が絶たれた事が。

僕が手間取つてゐる間に、全ては終わつてしまつたんだ。

ここからは後から聞いた話。

村人達は意識をなくした僕を縛り上げ、富司の家の土蔵に縛り付けた。そして、眠つてゐたおりょうを叩き起こすと、訳もわからずにいる彼女を風呂に入れ、白装束に着替えさせた。

幼いながらも、おりょうは村人達の殺氣立つた雰囲気を感じ取つたのだろう。抗つたりはしなかつたのだという。富司はおりょうに事の顛末を話して聞かせた。意味は解るまいを思つていたらしい。ただ、どうして自分が死んでいくのか、何も知らせずにいるのは理不尽だと富司は考えたのだと語つ。ならば「村のために死んでくれ」というのは、理不尽ではないというのか?

おりょうが川岸までやつてくると、そこにはすでに人柱用の穴が掘られていた。

まつたく、手際のいい事だ。

富司がおりょうを促すと、おりょうは彼の顔をじっとみつめていたらしい。これから自分を殺そうとしている相手の顔を。そして富司は、その真っ直ぐなおりょうの瞳を、最後まで見ることはできなかつたそうだ。

幼いおりょうは穴の中に降ろされた。抵抗する素振りも見せず、諦めたような表情で、静かに手を合わせていたんだそうだ。まるで彼女のその姿が自分達を責めるように感じたのか、それとも早く見えなくなつて欲しかつたのか。

小さなおりょうの姿は、どんどんかけられる土に埋もれて見えなくなつていった。

最後の土が穴にかけられた時、山が震えた。明け方の白み始めた空に、山鳥達が一斉に舞い上がつた。得体の知れない音が、空気を振動させている。それは、山に住むすべての動物達が、おりょうの死を悼む哀惜の声だった。

それを聞いた時、村人達は胸の中で「やつてはいけない事」をしでかしてしまつた、という気持ちが芽生えたらしい。祈祷をしてくる富司を残して、ひとり、またひとりとその場を去つていった。そして谷川には、富司の祈祷する声がいつまでも響いていた。

これが僕の聞いた話。

すべてが終わつてから僕は土蔵から出された。

村人も僕も、村から出て行く事を望んでいたが、橋が出来上がらなくてはどうしようもない。互いが不満を抱えたまま、僕はもうしばらくこの村に滞在する事を余儀なくされていた。

でも僕に、出来上がつた橋を渡る勇気はあるだらうか？ あの幼い少女の上に出来上がつた、新しい橋を？

そして村には次なる変調が現れていた。

おりょうを人柱として捧げたその日から、獣師達の罠に獲物がまったく掛からなくなつたのだ。動物の姿がパツタリとみえなくなつ

た。山の恵みである山菜も姿を消した。たまに見つかっても、立ち枯れた状態。

山は完全に、村を見放していた。

何より、おりょうを捧げた事で竜神の怒りを解き、雨をやませてもらおうと考えていた村人のアテが外れた。雨は、いまだに降り続いている。尚、やむ気配はない。

「私は間違っていたんでしょうか？ そんな気がしてしまったのです」窓辺で空を見上げていた僕に富司が話しかけてきた。

「気付くのが遅すぎやしませんか？」

富司の家に世話をなっているとはいえ、愛想よく出来る状態ではなかつた。

「最近、村人達が言つています。山に入つても獲物が取れなくなつた。山菜はあるか、木の実すら手に入らない。自分達は山の神の怒りに触れるような事をしてしまつたんだろうか、と」

「いまさらいやないですか。おりょうが竜神の巫女だと言つたのは、貴方ですよ」

「そう。だから、おりょうを捧げれば竜神は鎮まると思つたんです。でも、違つた……」

「竜神はおりょうが好きだつた。山の動物も、おりょうが好きだつた。ただそれだけですよ」

吐き捨てるようになつた。富司に言つても詮無い事なのは良く分かつている。でも、どこかにぶつけなくては、自分が怒りでじうじうかなつてしまふそうだ。

僕は、何も出来なかつた自分に怒つていたのだ。僕は一度も彼女に助けられたのに、何もしてやることが出来なかつた。富司にぶつけた怒りは、本当は僕自身にぶつけた怒りでもあつた。

窓に面した裏庭に、村の女性と子供が入つてきた。僕達を認める

と、軽く頭を下げた。

富司は窓を開けて声を掛ける。女性は申し訳なさそうに返事をした。

「すみませんです。」ちらりだと伺つたもんで……」

蓑笠を被つた女性は後ろにいた子供を押し出した。おりょうよりも、少し年上の少女。泣き腫らした目が真っ赤だ。

「「この子が……いえ、この子だけじゃないんですね……不思議な事を言い出したもんで」

女性は明らかに戸惑つてゐる。少女はまだしゃくりあげていた。

「どうしたんだね？」

富司の言葉に、少女は途切れ途切れに答えた。

「おりょうがね。竜神様とお話をしているの。夢を見たの。あたしだけじゃないよ。皆、見たって」

その言葉を聞いた富司の顔色が変わつた。窓から身を乗り出すと、女性に向かつて怒鳴つた。

「村中の子供を連れてくるんだ。うちの土間に集めなさい。早く！」

女性は富司の声に打たれたように走り出した。話していた少女は、身を縮めて立ちすくんでいる。僕は彼女に話しかけた。

「おいで。そんな所じや寒いだろ？ 表から回つて、中に入つておいで」

少女はうなづくと、裏庭から出て行つた。富司と僕は急ぎ足で表に回り、入ってきた少女を出迎えた。

「「こっちへおいで。もう少し、詳しく話を聞かせて。夢を見たんだね？」

僕の言葉に少女は話し始めた。
まとめるど、こうだ。

夢の中でおりょうは、とても綺麗な声で誰かに話しかけてい
る。いや、正確には頼んでいるのだ。

泣きながら懸命に「村のみんなを許して」と懇願していると言つ
のだ。するとおりょうの前に、ひとりの男の人が現れて「絶対に許
すことは出来ない」と怒り出す。

するとおりょうは「ずっと一緒にいるから。どこにも行かない
から、村のみんなを許してあげて。もう雨を止めて」と男に頼むの

だ

そして田が覚めると、ドキドキして悲しくて、涙が止まらなくなつてしまつた。

……とこう事らしい。そういう間に、村中の子供達が集められた。

子供達は皆、真っ赤に目を泣き腫らしている。そして口々にこう言つた。

「おりょうの魂を、竜神様の所へ連れて行つてあげて」と……。

僕とおりょうの話はここで終わる。まだ続きは出来上がつていない。

なぜなら、僕は今、この村であるものを作つてゐるから。これが出来上がつたとき、この話に続きが生まれるのかもしれない。

とりあえず、雨は上がつた。おりょうの祈りが通じたのだろう。村人達は自分達の犯した、間違いに気が付いた。それに気付かせてくれたのは、おりょうと同じ、澄んだ目をした子供達。

村人達は橋の袂たもとにおりょうの供養のため、小さなお地蔵様を建立した。

小さな女の子が、静かに微笑む姿のお地蔵様。形式が違うかもしないが、そこは勘弁していただこう。僕みたいな素人が、見様見真似で彫つたモノだ。

それでも、朝な夕な人々は花を供え、香を焚く。自分達の犯してしまつた罪を忘れないように。そして、自分達のために静かに逝つてしまつた少女の安息を祈つて。

僕はただ一心にノミを振るひ。

今作つてゐる一体田のお地蔵様は、辰ヶ淵に沈めるための物だ。おりょうの魂と竜神が一度と離れ離れにならなくてもいいよつて、このお地蔵様を沈めるつもりなのだ。

村中の子供達が、一夜にして同じ夢を見たあの日から、辰ヶ淵は

「おりょうケ淵」と呼ばれるよつになつた。

村を守る少女を忘れないように

（完）

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7936s/>

おりょうヶ淵

2011年8月11日03時39分発行